

一附 中比までは木地あるひは金鮎魚鮫にて上を包み、金銀鹿の角をかさね、また唐蒔繪を以て豎横の飾とせり、近代本阿彌何某此道をこのみ、且暮に工夫をこらし、洛陽天神の厨子正阿彌といへる弓師を招き、角弓かどゆみを削らせ、附も下細く、下地を金襴緞子にて包み、上を紫のほそき絹にて鶴にまきそめしより、左の手のうちおやゆびの押かけこゝろよく、稽古に年數をかさねず、矢數のあたる事となりぬ、また中比までは弓も圓く尤弱く、矢もかるかりしゆへ、矢數おほく、中人まれなり、當代は一二月射ならひし人も、矢數おほく、中る事、是併本阿彌某の工夫による也、其上弓師矢師も名人出來て、其心持のごとく、弓矢を製するゆへなるべし、予が流は、附の上の幅八分、下の幅七分半に作る也、附の幅ひろきは持よく、其上能道理ども有也、附の上の差込の弓の金物、いろく物すきあれども、指臺の爲にあしき也、筒金一筋入か、又は繪様なしのかなものよき也、下のさしこみのかな物は、いかやうにもかざるべし、

一弦 琵琶の三四の間の緒を用ゆべし、さりながら今はいろくの弦あり、弦に大小あり、細きつるは矢差、太きつるは矢落るもの也、まかれども、太きは矢ちらぬ物也、銀にて露を入る事定りたる事也、予が流は露をいれず、搜さぐもなき也、いろくの道理ある事也、扱右つらみつけの摺付ひだりの押掛心の拍子規込、いづれもひやうし揃へ、心もち楊弓の氣になりて、矢を放らたらば、大かた逃るといふ事有まじき也、よく稽古あるべし、

一藁 むかしはのべつけの弓なりしゆへ、ふくろも長かりき、近代すべて繼弓となりぬ、それゆへに袋のたけも短くなりぬ、さして定れる寸法なし、好む所に隨ふべし、

〔雍州府志七土産〕楊弓略○中 今造楊弓并矢人在所々、京極下御靈前小倉出羽之製造爲良、

〔人倫訓蒙圖彙五〕楊弓師 中にも下御靈の前小倉出羽椽其名聞ゆなり、江戸は神田天神の前

〔楊弓射禮蓬矢抄追考〕楊弓興隆なれば、弓師矢師の本名所付まで記す、○中略